

多作之、

〔重修本草綱目啓蒙^{二十六}〕桐油織紙 カラカサガミ 桐油ノカラカサガミ

和ノ雨傘ハ、荏油ヲ用ユ、唐山ニテハ、油桐ノ油ヲ用ユ、

〔我衣〕元文比ヨリ傘ノ風キヤシヤヲ第一トシテ、巧者ノ上手出トカク手ヌキヲシテ、下直ニウル、地ニテモ、白張骨ミガキ、花奢ニシテ、シヤウヅクナシ、直段六七尺程ナリ、カツ好ヨク高直ナリ、

〔萬金産業袋^一器財〕傘細工

傘^略○圖のさし渡、片々貳尺壹寸五ぶツ、骨竹五拾本是を五十間といふ、骨竹六拾本、これを六拾間といふ、但、大坂傘は、五拾間といふに、ほね五拾貳本、あるひは五十四本あり、これ六間張といふ事有ゆへ也、紙は古來より森下をつかふと人みないへども、今は國栖紙のみにして、森下はかつてつかはず、故は國栖は森下たる紙大きにして、六十枚一帖なり、森下は四十八枚一帖にて、紙は天地ともよほど小場也、玄かもねだんは、くずかはまたむつかしき方なれば、出入のちがひ、されば森下とくずとの紙のちがひにて、つよきはきのわかちもある事かといふに、いさ、かもつてその相違なし、さるによつて世間一統、みなくず紙を用ゆる事なり、糊はわらびの粉の玄ぶ合せ、油は荏を二へんづ、引、天井ばかり青を紅葉といひ、ぐるりの青きを軒青^{のき}といふ、俗に蛇紋^{のき}たるし等は、油をひかぬさきにか、すべし、尤油を引て書ても同心事なれども、ひかぬさきよろし

略○中

糊の焼^{たき}やう、上わらびの粉壹升に、水貳升いれて煮る也、よく摺木にてかきまはし、かげんよくにえたる時すり鉢へあけ、澀すこしづ、見計ひにいれ、すり木にてねる、すいぶんねるほどよろし、〔守貞漫稿^三履^十〕享保中、紀和歌山ヨリ形小細ノ精製ナル傘ヲ漕於江戸、風雨ニハ損易シ、挾宮ニ納メテ急雨ニ備フノミ、元文以來、傘專ラホソク輕キヲ良トス、江戸ニテ磨キ骨無裝束糸、白紙張ヲ